

「自然体験活動指導者養成事業 補助指導者養成研修会(訪問講座)」

- 【主催】** 国立阿蘇青少年交流の家
【後援】 熊本県教育委員会 熊本市教育委員会
【期間】 平成24年 6月23日(土)
【実施場所】 熊本大学工学部 2号館214教室
【参加者】 大学生11名、一般 2名 合計13名
【性別】 男性 7名、女性 6名
【講師】 熊本大学 教育学部 教授 古賀 倫嗣 氏
 国立阿蘇青少年交流の家 企画指導専門職



アイスブレイキングの演習

1 趣 旨

「小学校の1週間の自然体験活動」において、教育効果の高い自然体験活動や生活体験活動を提供するために、活動時の補助指導や活動の様子の把握と助言などを行う補助指導者を養成するために、本事業を実施した。

2 目 標

- (1) 子どもたちに自然体験活動が必要であることがわかる。
- (2) 自然体験活動の基礎的な知識・技術を身につけることができる。
- (3) 安全管理の重要性や危険予知の在り方がわかる。

3 事業展開

(1) 研修プログラム

日程	午 前	午 後
6月23日 (土)	○開会行事 ○講義 (1.5時間) 学校教育における体験活動の意義 ○講義 (1.5時間) 教育課程と体験活動の関連性	○講義・演習 (1時間) 自然体験活動の技術 「アイスブレイキング・レクリエーションゲーム」 ○講義・演習 (1時間) 安全管理 「危険予知トレーニング」



グループワークの様子

(2) 目標達成のための工夫

① 指導体制について

本講習にあたっては、企画指導専門職2名が分担し「教育課程と体験活動の関連性」と「自然体験活動の技術（アイスブレイキング・レクリエーションゲームの実際）」、「安全管理（危険予知トレーニング）」の指導・助言を行った。それぞれの専門職が研修で学んだことや、実際に事業を行って感じたことや経験したことを伝えるようにしたことで、参加者から「わかりやすかった」というアンケートの回答をいくつもいただくことができた。講義「学校教育における体験活動の意義」については、熊本大学教育学部の教授を講師とし、指導を依頼した。これにより、体験活動をととした人間関係づくりやコミュニケーションの在り方等について、専門的な立場から豊富な経験に基づいた話をしていただき、理解が深められるようにした。

また、研修会については、学生が参加しやすい熊本市内の熊本大学工学部で実施した。

大学の先生方から学生に本研修会の趣旨等を説明していただいたことで、複数の大学から参加者を募ることができた。



講義の様子

② プログラム内容の充実



アイスブレイキングの演習

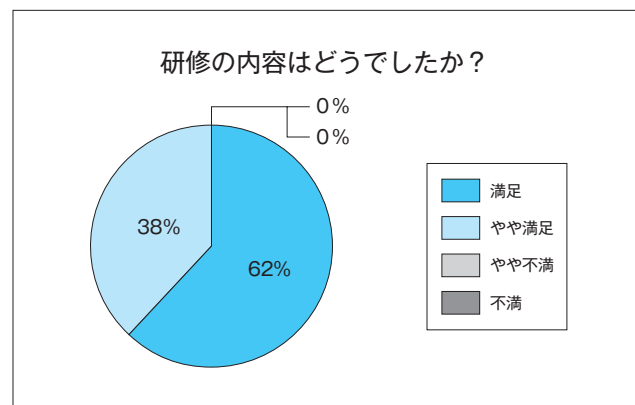
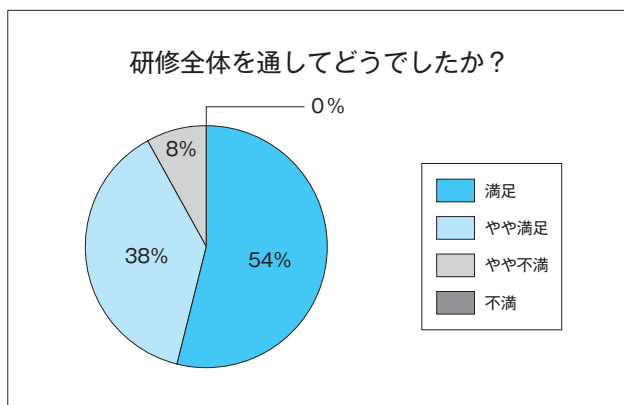
ただ単に楽しいだけのアクティビティの設定やプログラム作成に終始することなく、子どもたちが到達すべき目標はいったい何か、ということを考えた上で、アクティビティの設定やプログラム作成にあたるように指導した。また、それを「体験活動と教育課程の関連性」におけるグループワークをととしたアクティビティの企画・立案や「自然体験活動の技術（アイスブレイキング・レクリエーションゲーム）」におけるゲームに関する演習の振り返りの視点にし、改善を図っていけるようにした。

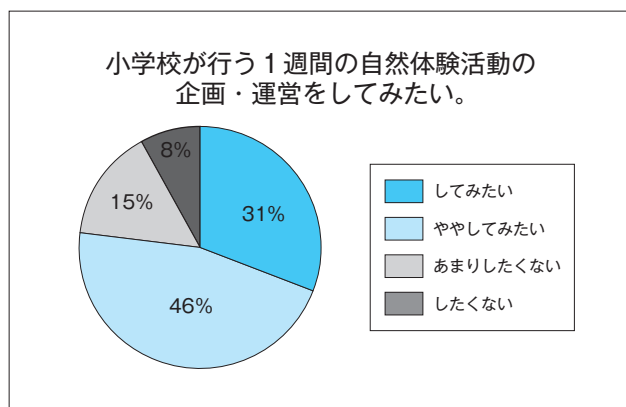
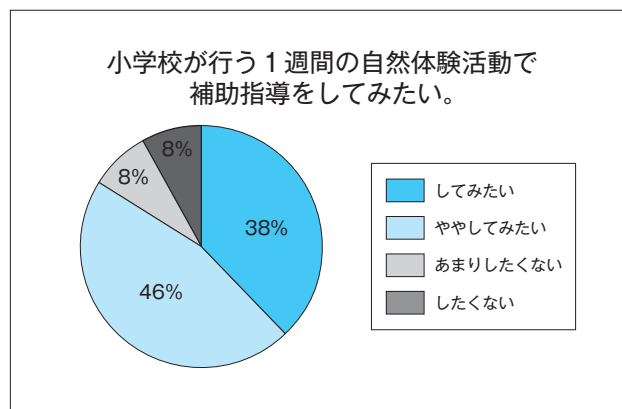
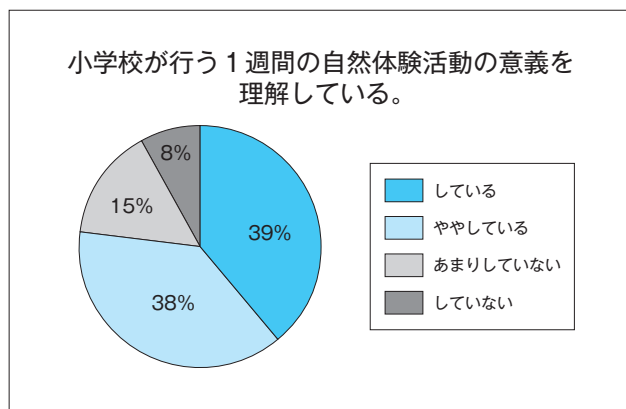
③ 視覚に訴える教材の選択

日程的に、一日で多くの単位を修得するためにプログラム自体が窮屈になった。そこで、参加者になるべく負担に感じないように話ばかりではなく、多くの写真や映像を使った講義を取り入れた。具体的な表、グラフ、写真、動画を使うことで受講者にとっても、結果的にはわかりやすい内容となったようである。

4 結果

アンケート調査の結果は次のとおりである。





講義の様子

【参加者の声（アンケート記述）】

- アイスブレイキングや危険予知トレーニングなどの内容を、演習などをとおして自然体験活動の重要性がよく分かりました。学んだことを今後子どもたちと関わっていく中で使っていきたいと思いました。
- 「学校教育における体験活動の意義」の講義は、自分にとって非日常的なもので大変興味深く聞かせていただきました。コミュニケーションのスキルを高めることの大切さもよく分かりました。今後自然体験活動の補助指導やボランティア活動に進んで参加したいと思います。
- 講義の内容も分かりやすく、グループのみんなと協力できました。とても意義のある研修会だったと思います。
- 研修を1日で行うか、2日で行うかでもだいぶ違うと思いますが、もっと長くじっくりと研修を受けたいと思いました。

5 成果と課題

(1) 成 果

- ① 参加者は少なかったが、研修をとおして「自然体験活動の重要性がよく分かった。」「今後自然体験活動の補助指導やボランティア活動に進んで参加したい。」という感想を得ることができた。
- ② アイスブレイキングやグループワークをとおして、参加者同士が楽しくふれあい、お互いの立場で様々な考えや情報を伝え合いながら研修を深めることができた。また、熊本大学教育学部の古賀先生により、体験活動をとおした人間関係づくりやコミュニケーションの在り方等の重要な内容を指導していただき、参加者からも「大切な内容を楽しく学ぶことができた。」という感想を得た。
- ③ 今回、本施設職員2名が分担して講義を行った。それにより、職員自身が自然体験活動に関わる研修を深めるとともに、参加者と一体となった事業を展開することができた。
- ④ アンケート結果によると、事業全般についての満足度は高かった。大学教授と本施設企画指導専

門職の講義・演習が分かりやすかったことが参加者のアンケートから読み取れた。講義・演習が一般的に参加者の実態に即した内容であり、参加者の自然体験活動への指導に対する意欲や理解の向上にもつながったと考える。

- ⑤ 「体験活動と教育課程の関連性」や「自然体験活動の技術（アイスブレイキング・レクリエーションゲーム）」において、アクティビティやゲームについて考えさせる際、「何のためにするのか」という視点を与え、活動の目的を意識させるようにした。その後の演習において、参加者たちが子どもたちの到達すべき目標を考えながら、アクティビティの設定をする姿が見られた。また、レクリエーションゲームの目的や意義がよく理解できたという意見や子どもたちと関わる際に使っていきたいという意見が聞かれた。

(2) 課 題

- ① 昨年は11月に行ったが、その後の事業が少なくせっかく取った資格を生かす場面がないということで、6月に開催日を変更した。しかし、6月は熊本大学の学生は臨時の講義があったり、各部活動の大会があったりして、今回はそのことが裏目に出た形となった。（つまり、参加者が減ってしまった。）今後は、大学の講義の計画や部活動の大会計画も視野に入れて日程を考えていかなければならない。
- ② 今後も参加者の自然体験活動に関する知識や経験等の実態に応じた研修の内容や方法を考慮し、指導にあたる必要がある。
- ③ 参加者の自然体験活動に関する知識や経験等の個人差は小さくないため、研修内容や指導・支援の在り方には今後も十分な配慮をし、さらに研修を充実させる必要がある。また、今後の補助指導者としての活動の勧めや全体指導者養成研修会への参加の勧めを行っていく必要がある。